

香取遺産

Vol.67

よしがみ
「良文貝塚」

利根川下流域最大級の貝塚



▲良文貝塚近景

古代人が捕食して捨てた貝殻が堆積している遺跡を貝塚と呼んでいます。利根川下流域は縄文時代に多くの貝塚がつくられ、全国有数の貝塚地帯であることは、本紙でも何度か取り上げてきました。

貝塚地区にある良文貝塚は、縄文時代後期（3〜4千年前）頃のもので、標高50mの台地平坦部と斜面からなり、斜面部には10カ所の貝層が確認されています。

この貝塚が初めて学会に紹介されたのは明治25年です。当時は「貝塚村貝塚」という名称でしたが、大正時代には「良文村貝塚」、さらに昭和30年に良文村が小見川町に編入されてからは「良文貝塚」と呼ばれています。

記録として残っている最初

の発掘調査は、明治28年に東京帝国大学（現在の東京大学）によって行われた調査です。

昭和2年と4年には、大山史前学研究所と地元有志によって調査が行われ、4年の調査では、台地東斜面の貝層から香炉形顔面付土器が出土し、良文貝塚の名を一躍全国に知らしめることになりました。

昭和5年には民有地15筆が国史跡に指定され、千葉県の貝塚としては初めての国指定史跡となりました。また、地元有志により貝塚史蹟保存会が設立され、現在も保存整備活動が続けられています。

本貝塚は古くから発掘調査が行われてきましたが、いずれも斜面に堆積した貝層を対象としたものでした。そのため、貝を捕食し、貝殻を捨て

た縄文人の居住区と思われる台地平坦部の調査は行われませんでした。

市教育委員会は、平成20年度から、遺跡の範囲・性格・内容を把握するために確認調査を実施しています。その結果、台地平坦部で竪穴住居跡や貯蔵穴など数多くの遺構を確認し、土器や石器などの遺物も見つかっています。また、住居跡などが確認されない広場的な空間もあることがわかりました。

これまでの発掘調査の成果により、台地平坦部に営まれた集落と、斜面に形成された貝層（ごみ捨て場）との有機的な関係が明らかになってきています。

問い合わせ
生涯学習課

☎(50)1224